慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	実践女子大学図書館常磐松文庫蔵 奈良絵本『おちくほ』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.52- 75
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0052
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実践女子大学図書館
常磐松文庫蔵

奈良絵本『おちくほ』翻刻

石川　透

例言

一、本翻刻は、実践女子大学図書館常磐松文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（春之上・中・下）、同文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（秋上）の二本から成る。

一、この二本は、チェスター・ビーティ図書館蔵『四季さうし』（夏之上・中）、市古貞次氏蔵『佚名物語』（三冊）とともに、別本『落窪の草子』（仮称）の一部を構成するものと考えられる。尚、以上四本を含めた、別本『落窪の草子』についての考察は、別稿に譲りたい。

一、二本の書誌は以下の通り。

『おちくほ』（春之上・中・下）

奈良絵本。袋綴、三冊。竪二九・九糎、横二二・四糎。料紙、鳥の子紙。紺地金泥草木模様表紙。表紙左上の題簽に「おちくほ 春之上（中・下）」とある。内題なし。墨付、上・二五丁、中・二五丁、下・二二丁。毎半葉一〇行。字面の高さ二三・五糎。挿絵、上・八頁、中・七頁、下・七頁。

『おちくほ』（秋上）

奈良絵本。袋綴、一冊。竪二九・四糎、横二一・八糎。料紙、鳥の子紙。紺地金泥草木模様表紙。表紙左上の題簽に「おちくほ 秋上」とある。内題なし。墨付、三三丁。毎半葉一〇行。字面の高さ二二・五糎。挿絵二二頁。

一、翻刻に際して、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、読点を多く施した他、（　）をもって丁数やママを示した。

一、最後に、翻刻を許可された実践女子大学図書館に、厚く御礼を申し上げたい。

おちくほ　春之上（題簽）

かしこき御代に、つかうまつれる人は、おほかめれと、すくよかならん事を、すゑにのこして、こと草のたねにもせまほしと、おもへる人こそは、ありかたけれ、定敦の大しやう大弐なとか、ふるき都の事をいへるは、さらなり

ときうつりて、いまは、人の心もいまめかしく、よろつ、わかやかなることのみ、おほかりけり、されとも、御まつりことは、みさほにして、いにしへにかはるとも見えす、わかきかんたちめにいたるまて（1オ）、その才、優ならんことをのみ、おもひて、その業、いつしかけちめもみえす、聞えありぬ

こゝに、なか岡にすみ給へる、うちさはの中なこんかねかたと、聞えし人、おはしけり、御父は、御とし四十あまりにて、大納言をかけさせ給ひて、ほとなく身まかり給ひぬ、御母は、准后の御はらからにて、おはしけるか、このちうなこんとのを、御かた見とおほして、玉ゆらもはなちたまはす、かしつかせ給ふほとに、なへてならす、おいたち（1ウ）給ふにしたかひて、さいかく、ゆふにおはしけるほとに、御とし十八歳のすゑつかた、権中納言たかのふのきやうと、聞えし人の、ひめきみを、むかへさせ給ひて、かしつかせたまふ（2オ）

〔挿絵・第一図〕（2ウ）

されとも、ちうなこんとの、御としなかはもすきたまへれとも、御子ひとりもいませさりけれは、なかきよのいさときにも、これをのみなけき給ひけるか

あるとき、御はゝ、きこえ給ふやうは、御身いとけなくして、父におくれ、いかはかりのおもひに、しつみしかとも、かたみとおもひて、とかくとおほしたてゝ、かくのみなりぬ、今はゝや、御身もなかはすきさせ給へは、そのあと、しるへきものゝなきこそ、ほいなけれ、すゝろに、これ（3オ）のみこそは、老の身のまとひなれと、うちなけき聞えけれは

中納言殿、北のかたへおほせらるゝは、なき子をねかはんには、ほとけに申さんにはしかしとて、てうほうしの御ほとけへ、まうて給ひて、いのりこたせ給ふほとに、院主の僧も、けんとく、いみしき僧にて、おはしけれは、御ねかひ、しやうしゆし給ふへきよし、いとたのもしけに、きこえけるほとに

うちよろこひて、とし月をあけさせ給へは、よにありかたき、ひめ君いて（3ウ）き給へり、まことに、卞花の玉よりも、ありかたき事におほして、かそいろのてうあひは、いやめつらかにそ、見えにける、月日にしたかひて、世にいつくしく、おいたちたまふほとに、御とし十二さいにそ成給ふ

ちうなこんとの、かはかりいつくしき姫なれは、なみならん人には、みせましとそ、おほしける、御めのと、かいしやくなと、ひめもすにまとゐさせて、かしつき給ふか、この姫君、つねに、ことをすかせ給ひて、しのに、是（4オ）もてあそひ給ふほとに、たくひなくそ聞えける、くきやう、てんしやう人、きゝをよひ給ひて、いかならんたよりもかなと、おもひまとはぬ人は、なかりけり（4ウ）

〔挿絵・第二図〕（5オ）

こゝに、右大臣かねさたこうの猶子に、おちくほのちうしやうと、聞えし人、おはしけり、此人は、かたちめてたきのみならす、さいかくいみしき人にて、おはしけれは、院内の御おほえも、他にことなれは、かそいろの御てうあひも、よのつねならすそ聞え給ふ

よろつに、心つかひのやさしききみにて、おはしけるか、すてに、御とし十七さいに成給ふ、やよひのはしめつかたのころほひなるに、おほきまちのふるき御しよを、あらため（5ウ）させたまひて、ひんかしおもてに、そのをしつらひ、あけくれ、この御しよにのみ、うちこもりおはして、ともとちのわかかんたちめ、うちかた

らひ、物して、あそひくらし給ふか
はつ花さくらは、なこりなく、ちりうせぬ、おそさくらの、きのふけふ、さかりとみえけるを、人々は、あはれと見給ひて、春の宵の一時を、千金にもかへしといへるは、いとおもしろしとこちて、ゑいにかたふきては、けうある詩なとを、すんして、あそひたまふに（6オ）、東風の、いとはしたなく吹来て、木すゑの花をちらしけれは、中将との
しはしとて、とむるかひなき、さくら花、名こりもあらす、かへる木の本
春宮佐信方
名残あり、またこん春も、たのまれす、あらしにつるゝ、花しおもへは
かやうに、うちたはふれさせ給ひて、ひめもすくらさせ給ふか、おりふし、一の蔵人すけかぬは、襖狩衣（あをかりぎぬ）にて、太刀をはき、きよらかにいてたち（6ウ）、一品の御所へ、まいり給へりけるか、つゑちのほかへとをりあひけるか、人のけはひのきこゆれは、うちまはりて、入てみけれは、御めのとの六位は、見て、人々、かう〳〵なんと、きこえけれは、うち入て見るに、さしき、けうあるさまなりちうしやうとの、こはいかにや、なにとしてか、いり給ふやらんと、きこえ給へは、すけかぬは、かう〳〵なんありて、とをり侍るに、いとうらやましき、御けはひのやうをきゝてこそ、たちいり侍ると、たかひに、こ（7オ）よなくすして、ともにあそひぬるほとに、夜もはやうちふけぬと見えて、ちかきいゑの鳥の音も聞えけれは、をの〳〵帰り給ふ
春宮のすけ、あすは内にてあひなんとて、いとよろほひて、たち給ふ（7ウ）
〔挿絵・第三図〕（8オ）
さて、かへり給ひけれは、中将も、丁のうちへ忍ひいらせ給ひて、ふし給ふに、あくれは、内へ人々あつまり給へとも、ちうしやうは、いまた、おきもあからせ給はす、うちふさせ給ふほとに、けふは、春宮のみや、かもへ御しやさんと、聞えけれは、かんたちめ、てんしやう人、供奉（ぐぶ）したてまつり給ふへきよし、いらなく、つけきたりけれは
御めのとのたいふのつほね、丁のうちへいりて、やゝと、おこしたてまつりけれは、おとろき給ひて、なに事にやと、の（8ウ）給ふほとに、めのと、御とものよし、聞えけれは、けに、さそありぬへし、よひにしつみて、夜はなかはとこそおもひしなりとて、おきあからせ給ひて、物し給ひて、御手水つとめて、なをしさうそくし給ひ、かうふりをめし、いとあてやかなるよそほひは、やさしくそ、見えにける
御ともには、六位の進、わらはなと、くし給ひて、大炊の門へいりて、見たまへは、かんたちめ、殿上人、うへわらは、なまめかしく出たちて、いろめきあへるも、ひか〳〵しくそ（9オ）、うちみえぬ、御くるまのさきには、あやにくなるさうしきの、うちわらひて、いかめしけなるも、ことなり
君よりのおほせにて、おちくほの中将、宰相（さいしやう）のちうしやう、新三位の中将、騎馬（きば）にて、御ともし給ひにける、みちすから、御くるま、物しつかに、やりたてまつりける（9ウ）、よそほひ、きら〳〵しくそ、見えにける（10オ）
〔挿絵・第四図〕（10ウ）

〔挿絵・第五図〕（11オ）

午の刻はかりに、社頭に、御くるま、とゝめはんへりける、所務をはしめて、をの〳〵、あさ露にそほちて、はるかに、御むかひにまいりけるか、御ともし侍りて、いらせ給ひぬ、御くるまより、みすかきあけて、おりさせ給ふ

御としは、いまた十二三さい、容貌うつくしく、あてやかに、らうたき事かきりなし、にほひ、しめやかにうちかほりて、忍ひたまへる、御けはひは、ありかたくそ、みえ侍りぬ、かくて、御まへに、まいらせ給ひて、御きね（11ウ）むとも、御こゝろしつかにそ、見えさせ給ふ

官領あきのり、藤の花の、咲みたれたるを、たてまつりて

いく春を、そめいたしけん、藤か枝の、花のたもとは、千世もかはらし

それ〳〵と、聞えさせ給へは、おちくほは、きと、手をしつかせ給ひて

色ふかき、わかむらさきの、藤の花、君か袖のみ、なかくそむらん

君は、えいかんおはしまして、さま〳〵の禄（12オ）をそ、給はりける

扨、みやうしんを、いさめ給はんとや、おほしけん、御くわんけんあるへしと、おほせられけれは、うけたまはりて、おちくほのちうしやうは、琴をひき給ふ、さいしやうの中将は、琵琶を引給ふ、新三位のちうしやうは、ひちりき、蔵人のへんは、よこ笛なりおりしも、春のことなれは、双調に音をしらへ、手をつくして、さま〳〵のかくをこそは、あそはしける、峰ふきおろす春風の、松に吟するそのひゝき、いつれを（12ウ）わくへきやうそなき、こくらくしやうとのをんかくも、かくやとそ、おもひしられにけるきせんのとうそく、男女、ちやうもんせむとて、神庭にくひすをつき、かうへをうなたれ、耳をそはたてゝ、これをきくとはいへとも、更に、清濁をわけてきける人もなし、まして、呂律もわきまへす、されとも、胡巴琴を弾せしかは、魚鱗躍逆、虞公歌を発せしかは、梁塵動揺して、ものゝ妙を窮るときは、しせんと、感をもよほす、ことはりなれは（13オ）、諸人も堅て、満座、奇異のおもひをなしにける

明神もなうしゆうや、おはしましけん、内陣の斗帳も、ゆるくはかりにそ、見えさせ給ふ（13ウ）、をの〳〵、きとくにおほしめし、御しんかうは、かきりなし（14オ）

〔挿絵・第六図〕（14ウ）

〔挿絵・第七図〕（15オ）

かくて、日のあしも、夕陽にめくらせたまへは、くはんきよおはしましけり、ちうしやうも、かへり給ひて、御さうそく、ぬきちらして、しとねのうへにゐ給ひて、あら心くつしやとて、あしさしのへて、なて給へれは、めのとのたいふ、さしよりて、御あしをなてゝ、くつをやすめ侍りぬ

かゝるほとに、麗景殿に、めしつかへける女はう、とのものかみ、女御の御せうそこ、もちてきたりて、ちうしやう殿に、まいらせけれは、きのふの御物まうてに、さ（15ウ）こそ、御こゝろくつし給ひなん、また、家つとは、なとおそなはり給ふそや、ちと、いらせ給へなと、いとけうありて、聞えにける

中将は、主殿に、けふは、君につかへて、こゝちならぬそや、くれ

まとひて、かはかりのふせいなりと、聞えさせ給へは
とのも、聞えけるは、いつまて、君も、ひとりすみにて、おはしまし侍へるへき、しかるへきひめ君をと、みな〳〵たつねさせ給へとも、君は、いろこのみふかく、わたらせたまへは、いつれか、御心にかなひはんへらん（16オ）と、御心つかひ、さま〳〵に、おはしけるそや、かくおはしけるなかにも、おもひよりはんへる事こそさふらへ、かねかたのちうなこんとのの、ひめきみこそ、世にたくひなく、いつくしくましませ、かそいろの御いとをしみも、よのつねならす、なみ〳〵の人にはみせし、女御、后妃にも、まいらせはやとのみ、聞え侍るそや、いかゝおほしさふらふにやと、申けれはちうしやう、きこしめして、さる事とは、わかきかんたちめの、ほのめきしを、きゝけれ（16ウ）とも、たゝ、よのつねにきゝしなり、しかるへきたよりもあらは、心さしをも聞えはやと、のたまひけれは
とのも、たかく、をとなさせ給ひそ、やかて、ちうなこんとのへ、まいりはんへるおりからのさふらへは、中聞ゆへしと、さゝやきけるほとに、中将、よき事にし給ひて、ふかくちきりてそ、かへさせ給ふ
そのゝちよりは、人しれす、うちこもりまし〳〵て、ふみをかゝせ給ひて、主殿か、きたれるをそ、まちわひさせ給へりけるさるほとに（17オ）、中納言殿は、父うへのねんきにあたらせ給ふとて、法勝寺の慈延僧都を、しやうしさせたまひて、一七日かあいた、八軸の妙典をそ、よませ給ひける、導唱の御こゑ、いとありかたく聞えさせ給ふ、されは、尊霊も、このくとくにより給ひて、一仏乗のうてなに、いたらせ給ひなんとそ、見えにける、右大臣殿より、御追善ありけるも、いと有かたし
なきあとの、かた見にのこる、たらちねの、御法のふねの、ひほやとくらん（17ウ）
かくて、結願もおはりぬれは、導師へは、しろき御裳をそ、ひかせ給ふ
かくて、ひめ君は、打こもりてのみおはしけれは、御母うへは、めのとにおほせけるは、ひめ君をくして、下のたいへまいり侍りて、なくさめよかしと、の給ひけれはひめきみへ、このよしを聞えけれは、けにも、物さはかしからぬ、いとしつかなるところにこそはあれ、これにのみうちこもりぬれは、えさらぬ事のみ、おもひかさなりて、かきりなく心くるしきそや、母上（18オ）のおほせなくは、おもひたつこともあるへからす、はや〳〵ゆかはやと、おほせけれはめのと、こは、いらなく聞え給ふ物かなとて、女はう達、はしたなと、きら〳〵しく出たゝせて、ひめ君をは、こしにうつしまいらせて、忍ひやかに、御里の御所へそまいり給ふ、ひめきみは、人やりならぬこゝちにて、いそき給へは、めのとは、いさゝか、さきにたちて、物なととりつくろひて、いれ侍りけるこの御所は、あつま屋つくりにて、四はう、はれらかなり、おはし（18ウ）ますへき床には、みすまきあけて、あやのきちやうをかけて、かけふかくしつらひたりこのうちへさし入給ふ、さま〳〵のゑ、あそひなとをし給ひ、ひわ、ことをたんしさせたまひて、あそひ給ふほとに、いつしか、えならぬこゝ地し給ひける、みなみおもてのそへ、いてゝ見はやとて、上らう女はう、五六人めして、はしゐちかく、まとゐしたまひ

て、庭のけしきのあはれなるを、見給ひなとして、うちとけてあそひ給ふに、のきはの（19オ）梅の、いとにほやかに、こちふく風ににほひくるも、やさしくおほしけるに、折ふし、うくひすのきたりて、ほつえに、かなたこなたと、たはふれて、こゑ、いとひなひやかに、さえつりけるも、あはれにおほしけるか、かくそ聞えさせ給ふ

梅かえに、しはしやとかる、うくひすの、こゑもひなひて、あはれにそ聞

めのと、かくそ

鶯の、梅のほつえに、ほのめくを（19ウ）、ゑにもうつして、みんよしもかな

かくて、こゝにのみ、うちこもりておはしけるか、主殿のすけか、こゝにおはしけるをきゝて、よきたよりにこそあなれと、よろこひて、おちくほの御しよへいりてけれは

おりふし、ちうしやうは、このほと、方違（かたたがい）したまひてけるか、けさ、あさまたきに、かへらせ給ひて、母屋（も）のうちに、うたゝねしておはしけるか

めのとにあひて、聞えけるは、ちうしやう殿に、しかるへからん人を、みせたてまつらはやと（20オ）、人々は、事のたえまには聞え給へとも、此きみは、いろこのみにてましませは、なみ〳〵の人なとは、よも見給はし、大納言しけみちかとのゝひめきみは、世にきよけなるひめ君にて、おはしけれは、かそいろの御かしつきも、あまりあるほとなり、もとより、いみしと、おほしめしけれは、この君をたてまつらはやと、おもへとも、いまたおさ〳〵しけれは、つゐに、ちうしやうとのにもつゝみぬ、此人の外には、さして、心にくきかたもきゝ侍らす（20ウ）

とかくと、もとめ侍る所に、うちさはの中なこんとのゝひめきみこそ、御かたち、めてたく、あいきやうありて、いみしきひめ君にて、おはしけるよしを、つねに聞侍りしほとに、いつそや、御つかひにまいりしおりふし、ひめ君の御かたへまいりて、見たてまつ（マヽ）りしか、まことに、いつくしともいはんかたなし、されは、この君を中将殿にあはせたてまつらは、いかはかりめてたからんと、おもひて、御そより、たよりをもとめて（21オ）、きゝさふらへは、父うへは、女御にまいらせはやとのみ、おほして、そのつくろひのみ、ひたすらし給ふよし、きゝ侍るか、いかゝせんなき事にはあらすやと、いひけれは

めのと、申けるは、けにも、ゆかりの御すゑに、つかへ給へれはこそ、かくまていみしくきこゆれ、一もんの人々も、めやすき人あらは、みせたてまつらまほしと、あけくれ、わひさせ給へとも、いまに、しさたまらぬ事の、うたてさよ、かくて、すみはて給ふへき身にもあらす、ひ（21ウ）とりくらし給ふとても、こよなう、のとけくやおほしめすへき、いかにもはからひてたへかしと、しみ〳〵と、うちたのみきこえけれは

とのもゝうちはらひて、世はかたはすなる物かなとて、それよりおくへいりて、見けれは

ちうしやうとの、おきさせ給ひて、いかにや、主殿、このころはなとか見えさりつるそや、いかにしてか、とたえし侍るそと、の給へは

されは、このほとは、わか里におきはんへるむすめの、かせのこゝ地とて、いたはり侍るよし（22オ）、つけきたりさふらふほとに、

よろつとりちらして、さとへおりまいらせ、さいつころ、かへり侍るそや、かならす、おもく見え侍るは、かろくあるへき事なれはにや、ほとなく、さめ侍るほとに、みしろくありしに、今は、いさゝか、心うれしく、かへりまいり侍る也、されは、いつそやほのめきし人は、此程、さとの御所へおりゐたまひて、あそひ給ふなるよし、しらするものゝ侍るそや、されは、いまこそよきたよりなれは、まいり侍るへし（22ウ）、御せうそこ給はりなんと、いへはちうしやう、よろこひたまひて、さくらかさねのうすやうに、いとけうあるやうに、わひ給ひて、かゝせ給ひ、主殿にそたまはりける（23オ）

〔挿絵・第八図〕（23ウ）

主殿は、それより、ひめきみのおはします御しよへまいりけるめのとは、出て、こはいかに、なにとしてきたり給へるそや、めつらかにこそおほゆれとて、よろつさしをき、かしつき給ひとのも、いひけるは、御身にさゝやくことのみあり、こなたへと、いさなひけれは、丁のうしろにいりぬ、此ひめ君、御かたち、めてたくおはします事を、おちくほの中しやうとのは、きこしめして、いとたえかたけにおはしけるか、我身、此御たいへまいる（24オ）よしをほのきゝ給ひて、せうそこをひそやかに給はりしなり、いかにもして、この人にあはせたてまつるやうに、心つかひをし給へと、聞えけれは

めのと、此ひめ君をは、父うへは、女御にまいらせはやと、おほしけれは、いつかたより申させ給へとも、いさゝか、いらへもおはしまさぬ、みかとへまいらせ給はすは、春宮へたてまつり侍らんと、のたまふそや、あまりいとをしみ給ひて、御心はらしに、いとしつかなれは、さとのしつら（24ウ）ひやおはし候へとて、このころ、此御しよにおはしけるそや、いかゝ侍らん、まいらせてみ給へと、いへは

とのも、よろこひて、めのとゝつれて、ひめ君の御そはちかく、まいりける（25オ）

おちくほ　春之中（題簽）

ひめ君は、御らんして、いとらうたく、あひきやうある、御かほはせにて、やゝ久しく見え給はさりしは、いかなる事そや、このたいへうつりて、世の中のことしけき事を、みゝにふれす、なをさりの人々をあつめて、いと忍ひやかに、日をくらし侍れは、こよなう、こゝちもはれらかにと、のたまふも、いとあひきやうあまれり

主殿も、此ほとは、ふるさとのゆかりのものとも、えやみにより て、はる〳〵とまいりさふらへは、いと（1オ）かろき風にて、はやくやみぬ、まつよろこはしくて、のほり侍りしかは、君の、この御しよへ、うつらせ給ふことをのみ、きゝまいらせて、御ゆかしさのあまりに、まいり侍るなりとて、うちあけて、御かほを見れとも〳〵、めかれせす、かくまて、いつくしくおはしける事の、ありかたさよ、いかなる、ほとけほさつのへんけにて、おはしけるそやと、御そうかうの、くほむはかりにそ、なかめ侍りける

そのゝち、ひめ君は、いかにや（1ウ）、とのも、ふるさとのかたは、山ちかく、野里のもとなれは、さそ、物わひしくすまひて、けうあらんかし、うらやましきところのみ、見はんへりて、あるものかな、みやこにたかひたる事とものあらは、かたり給へと、申させ

たまへは
主殿、うけ給はりて、されは、ふるさとは、野分の風もすさまし
く、はにふのこやのわひしきに、鳥のこゑ〳〵かまひすく、苗代水
の水口に、よとみかへるもすさましく、あらをたかへすしつのおか
（2オ）、むくつけきありさまは、深山にすめる苔猿にことならす
また、しつのめの、はかなき竹にてあめる、ふこといふもの、ひち
にかけて、またいはけなきみとり子を、二人三人、あとに引つれ
て、沢辺におりては、芹をつみ、くろにゆきては、わかなの、いと
くゝたちたるを、つみそろへ、よもきの、またわかやかなるを、わ
らはにとらせなとして、ひめもす、なかき日をくらしあへるも、い
とあはれにみえ侍る
かゝる中にも、ふせいやさし（2ウ）く見えけるは、ひろき野の草
のあをやかなるに、野飼のうしのこゝかしこに、ひとつふたつ、い
たいけしたるか、おやの尾につきて、ゑはみするも、いと物あはれ
にて、らうたく見え侍りぬ（3オ）
〔挿絵・第一図〕（3ウ）
山もとちかきはやしの中に、ほこらをたてゝしか、暮つかたには、
とうみやうのかけ、ほのかに見えわたりぬるも、いとありかたし、
また、うき世をそむきて、山林に入て、しはしのやとりに、草のい
ほりをむすひて、あらしをふせくよすかとし、朝暁に、こんきやう
のこゑ、けいのひゝき、かねのをと、かすかに聞えわたるも、こと
にすくれて、たうとくおほえ侍る
いかなるたけきものゝふの、いきほひあまりて、いさましからん人
も、かやう（4オ）のところに、しはらくもすまゐて、こゝろをた
めなは、むしやうは、いかてかおこらさらん、いさゝかのあいた有
し我たに、あさ夕君につかへて、心をくるしめ、なみのたちゐに、
人のあひきやうをのみもてはこひ、いみしき人の心にしたかひて、
むさふりかほにたちまはるも、いとよしなくおもひ奉るそやと、か
たり侍りけれは
姫君、きこしめし、あはれにきゝ給ひて、いかにもして、かゝると
ころを見はやとそ、おほしける、もとより、しつか（4ウ）わさ、
世わたるいとなみは、いとはかなき物とは、きゝたるそや、きくた
にも、はかなく、つたなきわさにおもへるに、みたらましかは、さ
そあるらん、うらやましくも、聞ゆる物かなとそ、うちわらはせ給
ふ
そのとき、とのもは、ふところよりふみとり出て、これ御らんさふ
らひてたひ候へ、やんことなきかたより、たのみはんへるか、おほ
ろけの人の、よみさふらふへき物にもあらすと、申侍れは、いて
や、君にみせたてまつりてこそとて、是（5オ）まて、もちてまい
れりとて、さしいたし侍りけれは
ひめきみ、なにこゝろもなく、とらせ給ひて、おしひらき見給へ
は、色ふかく、人をねたくも、こひの瀬の、たちゐに物を、おもへ
るなと、こま〳〵とかきて
乙女子を、ふかくそ我は、こひころも、なみたの淵に、袖はくち
ぬる
と、かきたるを、とく〳〵と、うちうなつかせたまひてけれは
とのも、申されけるは、此うたのこゝろは、いかなる御事やらん、
きかまほ（5ウ）しくこそと、申けれは
ひめ君、きこしめし、おとめ子といへるは、十歳のうちそとのむす
めの、いまた、つまにあはさるをいへるとなり、それをこひて、あ

けくれ、涙にしつみしか、袖のふちとなりて、くちうせなんと、聞えしなりと、おほせけれは
とのもは、是をうちきゝて、是は、いかなる人の、かゝせ給ふとか、おほしめす、当時、君につかへさせたまへる人々のうちに、うへこすくきやうはおはせさりける、右大臣兼貞公の御猶子に、おへより、しかるへきひめ君たちを、申させ給へとも、好色の君にて、なみ〳〵なる人を、うけ引し給ふこともなし、されは、事のたよりに、君の御うへをきこしめして、わらはに、此ふみまいらせてたひ候へと、あなかちにおほせられ侍るほとに、いなみかたくて、これまて、もちてまいりたてまつるそや、しかるへくは、こゝろやすめの御かへりこと、給はり候へと、いとひやかに、さゝやきけれは（6ウ）
ひめ君は、御かほ、うちあかめさせ給ひて、あらよしなや、山みちにふみたかへて侍る物かな、父のきかせ給ひなは、よのつねならぬ、御とかめあるへきそやと、のたまひて、うちそはみてそ、おはしける
姫君の御めのとは、見たてまつりて、うつくしきひけこに、さま〳〵のくた物なと、つみいれて、もちてまいりてけれは、ひめきみ、見たまひて、とのもに、此ひけこをとらせ給ふ
とのもは、かゝるひか〳〵しき物を、給はりて侍れは、か（7オ）へりて、たれにか、とさんにまいらせさふらふへき、おもひ出たる御事こそさふらへ、たてまつる人こそ、おもひまうけ候へと、いひけれは
一間なるしやうしのうちより、めのとを、やゝと、よひけれは、あやしやとよ、たれなれは、いらなくよひたつるそやとて、たちいりてみれは
弘徽殿の御厨司殿より、ようの事ありとて、とのもを御たつねありけれは、かへるさをまちわひさせ給ふそや、はやく、事つとめなは、出やり給へかしと、きこえ（7ウ）けれは
このとのもは、大やうなる人にて、いかさまの事あれはにや、かくあはたゝしくは聞ゆるそやとて、めのとにあひて、此事、かさねてまいり侍るへし、よきやうに、ひめきみへは、ほのめきをき給へと、せつなくかたりて、ひめきみへたちかへりて、かう〳〵なん、申きたり侍れは、かへりまいりさふらふ、やかてこそ、まいり侍らめと、申けれは
ひめきみ、たまにまいれるものか、なにとて、事いらなくかへり給へるそや（8オ）、こよひは、あそひて、かへり侍れかしと、とめ給へとも、いとま申て、出やりにける（8ウ）

〔挿絵・第二図〕（9オ）

去ほとに、ちうしやう殿は、めのとか帰りの、きかまほしくて、その日のたそかれときまて、待給ふに、軒端に風のをとつれて、つまとのなりわたるも、それかとおほして、むねつふして、まち給へとも、見えす、いとわひさせ給ひて、けうそくにより、御手をうちかけて、つや〳〵物をあんしかほにて、おはしけるところへ、父大臣の御かたより、藤わか丸といへるわらは、御せうそこ、もちてきたりぬ
中将、ひらきて、御らんしけれは（9ウ）、おほせあはせらるへき事あり、はや〳〵いらせ給へと、あるほとに、中将殿は、ちからなく、出給ふへきとて、御さうそく、引つくろはせたまひて、六ゐの

しんと御ともにて、わらはにはかり、ともさせて、おはしける
扨、いらせ給ひて、見たまへは、母屋の簾、はるかにとりつくろひて、らうそくなと、ところ〳〵にとほさせたるていは、はなやかに、みやひやかなり、うちよりいらせ給ひてけれは
父大臣とのは、こよひ、春宮、左府なとの、御まうけをしはん（10オ）へれは、さてこそ、御身をもむかへまいらすれ、よろつ見まはし給へと、の給ひけれは
ふしきのまうけを、し給ふ物かなとて、かなたこなたと、とりつくろひて、かうろに、たきものなと、いみしくかほりて、まち給ふに春宮の御くるまのをと、つゐひちのほかに聞えけれは、大臣とのも、ちうしやうも、廊の外まて、むかひ出給ひてけれは、御くるまより、おりさせ給ふ（10ウ）

〔挿絵・第三図〕（11オ）

左府、かいしやくしたまひて、殿につかせたまへは、ちうしやう、らうそく、いみしくかきたてゝ、こよひの行啓こそありかたけれと、の給ひけれは
あまり、このほと、うちつゝきて、こゝちれいならされは、うち出て、まきらはさんと、おもひたちて、忍ひてきたれるにこそと、仰けれは、けにこそとて、さま〳〵にもてなし、かしつき給ふ
春宮の御まへに、たてさせ給ふ、御ひやうふに、かことしたる、いは山をかきて、まへに、谷水をかゝへて、そのかたはら（11ウ）に、あやしけなるいほりをむすひたるか、いほりのまへに、青柳の、いとしなひやかなるを、五本うへて、そのかたはらに、かめをふたつならへて、書をさしそへて、いほりの中に、あやにくなる老翁の、忽然としたるふせいを、さもあるやうにかきたり
春宮、御らんして、これは、いかなる物をかきけるやらんと、御たつねありけれは
ちうしやう、の給ひけるは、それは、陶潛と申仙人にておはしまし侍る、このとうさんは、書をこのみ、酒を（12オ）あひし候、まへなるかめは、さかつほにて候、つねに柳をすき侍りて、おのか前に、五もとつゝ、柳をうへて、そのかけに、けうかいをかくし侍りけれは、世の人、五本先生と、かうし侍るなりとそ、申させ給ふ
又、そのならひに、うつは物に璧玉をもりて、帝へさゝくるところを、さもらしくかけり、是はいかにやと、申させ給へは
むかし、或人、玉をみかとへたてまつる、君は、なゝめにおほしめして、すなはち、玉磨をめして、みかきて（12ウ）まいらせよと、ちよくちやうある、たますりは、うけ給はりて、みかきたてまつり候とも、ひかり、いつましきよしを申、帝、いからせ給ひて、玉すりをとらへて、右の手をきりたまふ
そのゝち、次のみかとへゆつらせ給ふに、また、このみかとも、玉すりをめして、みかきてまいらせよと、仰られけれは、是も、光は出ましきよしを申、みかと、いからせ給ひて、父皇の例なれはとて、かたもゝをきりて、はなし給ふ、玉すり、かなしみて、なく涙つきて、のち（13オ）には、くれなゐのなみたをなかせりと申
又、そのゝちのみかとへゆつり給へは、すなはち、玉すりをめして、みかきてたてまつれと、おほせらるれは、かしこまりて、みかきけるに、いかにもめてたき光いつる也、和氏璧玉といふは是なり、そのひかり、さすことは、車十二両をてらすといへり、荆山といふ山より、荒玉をもとめて、たてまつれるゆへ也とそ、申させ給ふ
君、きこしめし、あないみしの事や、いにしへの人は、よろつ、我

心にま（13ウ）かせて、ふるまひしことの、おこけなさよとそ、仰られける

かくて、女はう、采女は、御かはらけもとりけれは、はやうちふけぬとて、たゝせ給へは、うしかひ、御くるま、さしよせけれは、みやは、みすかきあけさせ給ひて、めされけれは、いかにもしとやかに、御くるまをつかまつりて、かへり給ひぬ（14オ）

〔挿絵・第四図〕（14ウ）

〔挿絵・第五図〕（15オ）

大しんとのも、ともにかへらせたまふ、ちうしやうとのは、夜もふけぬとて、こよひは、このてんにおはして、夜もあけぬれは、かへらせたまふか、ちやうのうちへいりたまひて、ふさせたまふ

さるほとに、ひめきみの御めのとは、けちかくまいりて、ひそめて申けるは、とのもか、もてまいりしふみは、よく〳〵見たまひけるにや、このおちくほのちうしやうとのは、右大しんとのゝ（15ウ）御子といひ、さいかく、ゆうちやうのきみにて、うちにも、ゐんにも、他にことなりし御おほえにて、はんへるそや、かそいろの人々も、いかならん人をも見せはやとて、かなたこなたのひめきみたちを、申させたまへとも、かうしよくの人にて、さらに、うけひきおはしまさす

されは、とのもかさいかくにて、ひめきみを、この人にあはせたてまつらは、いか（16オ）はかり、御父ちうなこんとのも、よろこひたまひなん、大しんとのも、さもあらは、御こゝろつかひもやみぬへしと、おもひよりて、かくいひはんへるそや、いつまて、かくひとりなかめかちにて、とし月をおくらせ給ひ（16ウ）、親達に、とやかくやと、物おもはせ給ふへきそやと、かきくとき申けれとも

あふさきるさのいらへもなく、たゝ、うちそはみてそ、おはしける

その後、ちうしやうとのへ、主殿は、まいりて、申けるは、さいつころ、ひめ君へまいり侍りて、心しつかに、よろつ、御物かたりとも申たてまつりて、うちとけあそはせ給ふに、御けしきよろこはしき折からなれは、かのものをとり出て、まいらせしに、つく〳〵と御らんして、御歌のやうを、御（17オ）物かたりまし〳〵けるそ、よそ〳〵なり

そのとき、うわさを申いてゝ侍り候へは、かそいろの、もれきゝ給ひては、すゑおそろしと、のたまひしほとに、とかくと、すかしたてまつるところに、うちより、よひたてはんへるほとに、ちからなく、かへり候へは、相国（しやうこく）の、麗景（れいけい）殿へ御いりあるほとに、主殿司つかうまつれとて、よひたて給ひしなり

それより、いかゝしてか、なひかせたてまつらんとて、おもひわつらひ侍りしなり、きのふも、わらはをし（17ウ）て、ひめ君のめのとかもとへ、せうそこをもて、とひ侍れは、くれつかたにこよと、かき侍るそやと、申けれは

中将、さこそはあるへけれ、うちすて給はて、返しとりて、えさせたまへとそ、おほせられける（18オ）

〔挿絵・第六図〕（18ウ）

扨、そのゝちに、の給ひけるは、いかにや、とのも、いかならんたよりも、もとめて、この人を、我に、ひとめみせてくれよかしと、あなかちに、申させ給へは

とのも、さほとにおほしめしさふらはゝ、此くれに、みつからまいり候へし、君も、いと忍ひやかに、たゝひとり、物にやつれて、おはしまし候へと、聞えけれは、心え給ひて、暮にはかならすとて、

めのとは、かへりはんへりける
そのゝち、中将とのは、あやしけなるおのこに、つくらせ給ひて、つほ（19オ）かさ、ふかくめして、わらくつをはかせたまひ、御とものわらはに、いかにやと、の給へは
うちゑみて、なにとやらん、にけなき御ありさまにてこそ、おはしまし候へと、申ける
ちうしやうは、ふせいつたなく、あらまほしきこそ、ほいなれと、かへりて、うちよろこはせ給ひて、御こゑなとも、ひなひたるこはいろにして、そのさま、いかめしくおはしけるを、みるも、いとそか〳〵し
かくて、その日の暮かゝるを、おそしと、まちつくし給ふに、ほともなく、日（19ウ）も西ようにかたふかせ給へは、とのもか、いりくるを、おそしと、まちわひ給ふに、たそかれときに、たゝひとり、ふるきねりきぬの、あはらなるを、引かつきて、きたりぬ
中将とのは、しはしあはせ給はて、後、出させ給ひて、かう〳〵してなん、しのはゝやと、おほせけれは
とのも、うちわらひて、さても〳〵、すけなく、おこのけなる御かたちやとそ、うちゑみにける、さもあらは、みつから、さきへ参るへしとて、うち出て
ひそかにめのとにあひて（20オ）、ちうしやう、かう〳〵なん、の給ふほとに、ほとなく、きたらせ給ふへし、こよひは月もおほろにて、人のかけもさたかならす、まかきのもとなる、うら戸をあけて、よそなから、見せさせ給へとそ、申ける
めのと、うちうなつきて、手つから、まかきのもとなる、うらとをあけて、扨、ひめきみに聞ゆるやうは、こよひは、月もおほろにて、空もかすみわたりさふらへは、おはしまちかく出給ひても、なにかしたまふへきとて、らうそく、いとひか〳〵し（20ウ）くたてゝ、ひわ、ことなと、とりちらして、人〻、とりかこみ、まとゐしてそ、見えたり
さるほとに、ちうしやうとのは、ひるつかたより、人やりならすおほして、かゝるありさまに、出たちぬるも、さすかにおもはゆし、すきしころより、主殿に、けさうせられて、恋のやつことなりぬる事の、おかしさよと、ひとりこち給ひて、出給ふほとに、かの御所にそわたらせ給ふ
しつらひを見たまへは、あれたるやとを、すこしつくのひて、人め（21オ）しのふの、軒に生て、つたかつらの、あをやかに、かへをとちて、夕の風に、うら吹かへし、さはきあへるも、いとあはれなり、かけかねをはつしをきし戸を、いと忍ひやかに、あけさせ給ひて、そのゝまかきをうちこえ、はしちかく、たちしのひ給ふに、心ほそさ、いかはかりなり
あやしけなる、いたしきのうへに、たちやすらひ給ひて、ことをきゝたまへは、けはひのわかやかなるか、つれ〳〵におはしまし侍るに、ひわをあそはし給へとそ、申け（21ウ）る、やゝありて、ひめ君は、引よせ給ひて、てんしゆに手をうちかけ、ねちなをして、しらへ給ふに、主殿は、きたりぬ
めのとは、是をみて、いかにや、ふしきにも、きたり給ふ物かなと、いへは
此あいたは、こゝ地あしくて、御さとのたいに、うちこもりさふらひしか、いさゝか、けふは、こゝちもてなをし侍るほとに、御ゆかしさにこそ、まいり侍りつれと、申されけれは

ひめきみ、こゝろにかけすは、いかてか、きたり給ふへきそやと
そ、おほせられける（22オ）
ちうしやう殿、忍ひいり給ふよしを、主殿は、めのとに、さゝやき
けれは、めのとは、袖を引て、めくわせしけれは、こゝろえぬ
さて、中将とのは、ひめ君を、板戸のすきより、つく〳〵と見給ふ
に、御としのころは、十五六に見えけるか、まことに、そうかうい
みしく、あてやかにして、らうたき事かきりなし、さくらかさねの
五つきぬに、うす紅梅のはかま、たかくめして、ひわをひさにをき
たまひて、はれらかにして、おはしける、まゆにこほれ（22ウ）か
ゝるかみを、ふりあをき給へる御ふせいは、女郎花の、露おもけに
て、秋風にたをめるよりも、まさりて、やさしくそ見たまひける
日ころ、主殿かいひしをも、いかはかりの人をかいふらんと、おも
ひしに、まことに、心にくゝもおはしける物かなと、みれとも〳〵
めかれし給はす、はやくして、ひわをひき給へかしと、御あしもた
ちこほりて、まほりゐ給ふに
主殿とめのとは、中将、忍ひ給ふことを、うしろめたしとおもひ、
えんに出（23オ）て見はやと、おもへとも、もし、つきて人も出な
は、いかゝすへきと、おもひて、たちもやらさりけるか（23ウ）
〔挿絵・第七図〕（24オ）
かゝるうちに、雨のそほふり出けれは、ちうしやう、あらにくのこ
よひの雨や、かくしては、いかゝたまるへき、もし、門もりにあや
しめられては、せんなかるへしと、おほしめして、ゆくりなくも、
しのひ出させ給ふ
いよ〳〵、雨も、はしたなく、ふりまさりけれは、ちからをよはせ
給はて、誰人隴外久征戎、何処庭前新別離するといへる、ふるき
心をおほしめし出て、笠うちかたふけて、このしつらひを、出させ
給ふもあはれなり
いよ〳〵（24ウ）しきりに、ふりまさりけれは、ある家の軒に、た
ゝすみ給ふに、軒の雫、いとおもしろくうつほとに、遠簷点滴琴筑
のことしといへる詩も、かはかりのことをやいひつらんと、おほし
出て、晴間をまちわひ給ふほとに、三更のころほひに、雨雲もひき
さりて、空もはれらかになりぬ
ちうしやう、よろこひ給ひて、いそき、はしり出させ給ふに、やう
〳〵かへり給ひてけれは
御めのと、はしり出て、こはいかなる御ほかうそや、浅ましの（25
オ）御ありさまかなと、あきれたるこゝ地にて、御ゆなとまいらせ
て、御身もすまし給へは、丁のうちへ、いり給ひてけり（25ウ）

おちくほ　春之下（題簽）

さるほとに、主殿は、その夜うちふけて、ひめ君も、丁のうちへい
らせ給へは、みな〳〵よりふしぬ
めのとは、主殿にさゝやきけるは、こよひ、ちうしやうとの、さた
めて、忍ひきたり給ひなんやと、いへは
とのも、されはこそ、きたらせ給はんか、おもひのつきぬ物から、
しとけなき雨に、あはせ給ひしことの、うたてさよ、さて、いかゝ
すへきそやと、いへは
めのと、申けるは、中将殿、うちなけきおほしめし給はゝ、御身と
わかはからひにて、あはせた（1オ）てまつらんに、なにか、くる
しき事の侍るへきそやと、いへは

さらは、こよひの御ふみに、かへり事をせさせ給へかし、みつから、かへさにまいりて、聞ゆへきにやと、いへは
めめのと、うちうなつきて、夜もあけわたれは、ひめ君に申けるは、ゆふへは、夜うちふけて、いかに、なかあそひにこそ、おはしまし候へ、されは、とのもゝかへりなんと、聞え侍る、また、かの人の御かたより、御文まいり侍るそや、心つよきやうにおはしまさんも、いと色なし（1ウ）、見給ひて、御へんしたまふへしと、申けれは
ひめ君、きこしめし、されはこそ、我も、としたけて、かくあるへき身にもあらす、つゐには、いかならん人にも、見え侍るへかめれと、かそいろの御こゝろ、かねて、とかく、返しすへき心地もなしと、いろふかけに聞え給へは
めめのと、申けるは、御返したにもし給はゝ、みつから、御父母へ聞えたてまつるへきそや、此ちうしやうとのへまいり給ふと、きこしめし侍らは、いみしく、よろこひわたり給ふへきそや（2オ）、此主殿のかみは、麗景殿、温明殿の女御の、よになきものゝやうに、おほしめす、つほねそかし、此人の、かく、わりなく申させ給ふうへは、いかてか、さかなき事をはきこゆへき、御かへしたにし給はゝ、中将、あさからすかしつき給ふへし、さもあらは、父ちうなこんとの、いかによろこひ給はさらんと、申けれは
ひめ君、御ふみとりあけて、御らんし、いまはたえかねてなと、かゝせ給ひて
我恋は、千尋のはまの、あまをふね（2ウ）、かひもなくして、
すみやはつへき
と、かき給ふを見給ひて、紅梅のたんし、一かさねに、かくそ
陸奥の、ちいろの浜に、ひくあみの、かゝりてもまた、かひやなからん
と、あそはして、引むすひて、いたしたまへは
主殿は、たもとにおし入て、やかて参候はん、ちうしやうとのに、聞えさふらふへき、ゆふへよりは、さためて、うしろめたく思ひ給ふらめ、つねにも、いらなく、みつからに聞え給へとも（3オ）、いさゝかのいとまなき身なれは、とふにかひなく、うちすきぬ、此人は、いつとても、こゝろしるからぬきみにて、はつかしきそや、はやくかへりなん、とかく時をうつして、ひるまになりぬるそやとて、うち出ぬ（3ウ）
〔挿絵・第一図〕（4オ）
それより、中将とのへまいり、見たてまつれは、おりふし、おはしまのかたに、うちかゝりて、庭の草なととらせて、おはしけるか、とのも、まいりたると、いへは、うちへいらせたまひて、いつちにやと、おほせけれは
主殿、しやうしのかけより出て、いかにや、君は、ゆふへは、いかゝおはせしけるそやと、申けれは
ちうしやう、うちわらはせ給ひて、扨も〳〵、あやにくき事にこそ、もしも、せきもりにあやしめられ侍らは、なたゝる事の、口おしくやありなん（4ウ）、雨は、いたくふりきぬ、あやしけなる、しつか身のありさまに、きぬうちかへぬれは、雨のしつくの、はたへをとをして、あさましくも、かなしくも、いはんかたなきそや、されはとて、この人をつく〳〵みて、しこりすまにあるへきにもあらす、いよ〳〵すゝろに、いとをしきそやと、こちたはふれたまへは

主殿は、うけ給はりて、あら、うたてしきめに、あはせ給ひける物かな、さこそはおはしますらめと、めのとゝおもひやりてこそ、有つれ（5オ）とも、せんかたもなくて侍るところに、さようちふけて、門守か、かけかねのはつれぬるを、あやしめ侍りしほとに、めのとか、たはかりて、いぬとの、外に、いたくなきしほとに、なになるらんと、あやしく思ひて、みつから、戸あけて見侍りしそやと、いひけれは、さてはとて、やみぬ

さて、ひめ君の御返事をまいらせけれは、ちうしやう、よにうれたけにて、おしひらき、御らんすれは、かくそ、たゝ、たのみもかひもなからましかはとの、こゝろねも（5ウ）ことはりかな、かきたまへる手のほとの、いみしさよ、かたちによる芸才にて、たらいたる人にこそとあれと、うちよろこひ給ふ

さて、主殿は、ちかきほとに、あはせ奉るへしとて、かへりける、中将は、はやくして、この人にあひなんことのみ、おもひふくれ給へり、また、ひめ君も、この事のみ、御心にかゝりて、いくはくの事をそ、おもひつゝけ給ふ、たかひの御こゝろくらへも、あはれにそ聞えける（6オ）

〔挿絵・第二図〕（6ウ）

さるほとに、女御は、主殿をめして、いかにや、中しやうは、いかなれは、あけくれ、ひとりすみにて、世をなかめかちにては、くらさせけるとそ、とうくうのおほせ事そや、されは、秋山の大納言の、むすめ、ふたりもち給へると、小弐かいひしほとに、いそき、たつねてまいれと、仰けれは

うけ給はり侍るとて、いてけるか、あら、むつかしき事を仰らるゝ物かな、中納言殿は、このひめ君を、ふかくおほしいれたまへは、今は、いかなる人にても、おもひかへさせ給ふ（7オ）事はあるまし、されとも、おほせを、いかてか、かすめたてまつるへきとて

大弐のつほねかもとへゆきて、かう〳〵なん、おほせられさふらふか、いかにおはしけるやらんと、いへは

されはこそ、光はかりに見えさせ給ふ、ひめ君はらから、ましますなれは、いつれにても、中しやうとのへまいらせ給ひて、しかるへしと、申まいらせしそやと、いへは

主殿、此中将殿は、いろこのみふかきゆへに、今まて、かなたこなたより、ひめきみたちを申させ給へとも（7ウ）、いさゝか、きゝいれさせ給はす、御こゝろに、いかゝおほしけるも、はかりかたけれは、まいりて、めのとに聞えはやと、いひて、かへりける

そのゝち、主殿のかみは、ちうしやう殿へまいりて、めのとにあひて、女御のかくまてはからひ給ふか、いかゝ侍らんと、いへは

めのと、うちきゝて、よしや、いかにおほせらるゝとも、この人もちひ給はし、すきし比、ときめきたまふ、有明のひめきみ、いとなまめける君なる事を、きゝ給ひて、とかくして、みせ奉れとも（8オ）、いかゝ見給ひけん、二たひとも、仰もいたし給はぬそや、いかなると、ゝひ侍りけれは、かたちおさ〳〵しからす、物のけちめみえて、よしなしと、の給へり

いかなる、さきの世のちきり、おはしけるにや、きゝ給ふより、こかれ給ひて、かいまみ給ふより、たえかたけにおはしけるなれは、たゝ、かなたこなたへ、こゝろをうつさせまいらせて、まよはせたてまつらんも、いかゝはしからん、たゝ、しのひやかに、はやくして、この人にあはせ侍るへきそやと、いへ（8ウ）は

主殿、うなつきて、さらは、こよひ、あはせ侍るへし、たそかれと

きにはあひなんと、ちきりて、かへりける
扨、中将とのへまいりて、こよひ、かならす、あはせ侍るへしと、めのとにちきりて、かへりさふらふそや、夕つかたには、まいり候ひなんとて、御所へそ、かへりまいりける
さて、女御へまいりて、大弐に、いさゝかの事を、あらまし、たつねて候へは、はらから、おはしまし侍を、いつれをなりともと、申侍ふほとに、ちうしやう殿に、聞えさふらへは（9オ）、しか〳〵、いらへもし給はす、こよなき御けしきなれは、みつからも、おもなしにて、たち侍りぬと、申けれは
女御も、うたてしき人にこそと、の給ひにける（9ウ）

〔挿絵・第三図〕（10オ）

さるほとに、めのとは、ひめきみに、こよひ、ちうしやうとの、いらせ給ふへきなれは、丁のうちそと、しつらひ侍らんとて、さしきのちり、うちはらひ、あやの御几帳かけなをしなとして、ひめ君にも、御しやうそく、きせまいらせける、紅梅のうちきに、柳の七つきぬ、くれなゐのはかま、ふみくゝみ、ひあふきとりそへて、あくまて、いつくしき御くしを、ゆりさけて、ゐ給へる、よそほひは、たくひはあらしとそ、みえにける
扨、ちうしやう殿は、はたには（10ウ）、しろき御小袖をきたまひて、くろきうきもむの御しやうそく、藤いろの下はかまにて、まゆふとうはかせ給ひ、御かうふりのうへに、しろきあやのうすきぬを、かつかせ給ひて、上蘢女はうの、さとかへりにことよせて、わらはひとり、つれさせ給ひて、やう〳〵日もくれかゝり給へは、しのひやかにそ、御所をいてさせ給ひにける
主殿は、さきへゆきて、中将殿をまちわひけるか、ほとなく、いらせたまひて、すいかきのもとに、たゝすませ給へは、主殿は（11オ）、あやしや、女はうのたちやすらへると、むねうちさはきけれは、中将、見給ひて、まねかせ給へは、さては、此君にこそと、おもひて、さしよりて、御手をとりて、忍ひ入まいらせける
かくて、御母屋のみすのうちへ、ちうしやうとのは、いらせ給ふか、姫君は、御さうそく、けたかくし給ひて、らうそく、たかくたてゝ、うちそはみてそ、おはしける、中将殿も、御さちかくなをらせ給ふ
めのとは、たき物かほりて、ちうしやうとのへまいらせけれは、そのゝち、また（11ウ）、姫君へそまいらせ給ふ
さて、御かはらけまいりけれは、ちうしやうとの、はしめさせ給ひて、ひめきみへまいらせ給ふ、そのゝち、主殿、給はりて、かなたこなたとまはりけれは、おさまりて、のち、夜もはやふけゆきなん、とのもは、こよひは、此御所にやとして、朝またきに、かへりなんとて、めのとかねやにそ、こもりける（12オ）

〔挿絵・第四図〕（12ウ）

そのゝち、中将とのは、丁のうちへいらせ給へは、ひめ君は、うちつけなれは、おもはゆけなるけしきにて、うちそはみ給ふも、あはれなり、御閨屋のあたりに、まとゐする人も、あらされは、らうそくも、とをく、ほのかにたてて、しつまりかへりたり
今は、夜も、いたくふけゆくそや、そひふしなんとて、ひとつ御さにうつり給ひて、さま〳〵、かたらひとらせ給ふほとに、ひめ君も、今は、御こゝろとけて、とかくと聞えしより、心にかゝりて、いさ（13オ）さかもたえまなく、人やりならぬこゝ地こそ、し侍りしなりと、たかひに、むつことつきさりけるに

八こゑの鳥もなきわたりけれは、あさいなは、人めのせきの、つゝましきに、いてやらんと、おほして、窓の戸をさしあけて、そらを見給へは、はや、山かつらさしわたしてけれは、ちからなく、きぬ〳〵にそなり給ふ

ひめ君、わかれ、かなしくおほしめして、またの夜を、ふかくちきらせ給ふ、中将、ねやを出させ給ふとて（13ウ）

あくるそと、聞もうらめし、鳥の音に、また立そふる、東雲のそら

と、聞えけれは、姫君

あけわたる、空に関もり、あるならは、しはしといひて、たのみやはせん

かやうに、うちたはふれ給ひて、たちわかれさせ給ふ、それよりは、たかひのおもひ、ふかく、此世ならす、後の世までもかはらしとそ、ちきらせ給ふ（14オ）

〔挿絵・第五図〕（14ウ）

そのゝち、とのも、ちうしやうとのにあひて、いかにおほしめすそや、しかるへからん人のあらは、また、御心をうつしかへはやと、おほしめすかやと、申けれは

うちゑみ給ひて、とし月、おもひよる人のあらさりしは、此人に、ふかきちきり有てこそはあるらめ、かはかりおもふ人は、世にふたりともあるへしともおもほえすと、の給へは

主殿のつほね、あら〳〵、ひかひかしのおほせ事や、まことに、ふかき御ちきりあるにこそ、かく、おほしめしさため（15オ）給ひなは、父大臣へしらさせ給ひて、御所へうつしまいらせ給ふへしとそ、おほしめされさふらへと、いひけれは、うちうなつかせたまひぬ

さるほとに、春宮は、麗景殿へおはして、いかにや、秋山のひめとも、はらからあるなるに、なとて、ちうしやうには、あはせ給はぬそやと、のたまひけれは

女御は、きこしめし、とのものつほねにとはせさふらへは、中将、そらさまにきゝなしけるにや、その後、なにとも、ほのめくことも侍らす、いかゝ有やら（15ウ）むと、申させ給へは

宮は、きこしめし、父大臣へ申させ給ひて、はやくみせさせ給へ、さもあらは、ちかきほとに、節会のおはしますか、此ちうしやうをも、中納言に任せらるへきとなれは、かく、いつまてひとりすみにて、いたつらにあるへきそや、父のおとゝにまさりて、才の、ゆふに、いみしくむまれたるとて、御おほえも、大かたならさるそやと、仰けれは、

女御も、まことにいみしく、ありかたき事にそ、おほしける

そのゝち、主殿のつほねを（16オ）めして、おほせけるは、いつそや、いひしことは、いかゝしけるそや、宮も、かう〳〵なん、おほせらるゝに、とくして、ちうしやうに、あはせよと、おほせられけれは

局、うけ給はりて、よく〳〵申聞えさふらへとも、とかくのいなせも、し給はねは、ちからなく、心ならす、日ものひはんへりぬ、いそき、中将とのをめして、聞えさせ給へかしとて、たちにけるさらはとて、おとゝへ、此事を申させ給へは、それこそしかるへき事なれ、ことに、春宮の、かく（16ウ）、はからせ給ふも、ありかたし、いかてか、いなみたてまつるへきとて、いそきて、ちうしやうとのをそ、めし給ふ（17オ）

〔挿絵・第六図〕（17ウ）

おちくほは、きこしめして、いかゝおほしけん、こゝ地あしきとて、まいり給はす

かそいろは、きこしめして、御つほねの玉井のまへを、御つかひにて、こゝちのやうを、みてかへれと、おほせらるゝほとに、まいりぬ

中将は、つねのところにおはして、さうしなと、とりちらして、まし〳〵けるほとに、玉井の前は、かう〳〵なん、おほせられ侍るそや、御いれいのやうには、見えたてまつらす、いかゝある御事にかと、中侍りけれは

ちうしやう、い（18オ）さゝか、風のこゝ地ありしか、ほとなく、さめぬれは、いまはやすし、やかて、まいりなんと、申させ給へは、玉井は、かへりぬ

そのゝち、中将とのは、御かうふり、さうそくまし〳〵て、六ゐをつれさせ給ひて、父の御所へそ、おはしける

父母は、見給ひて、いかにや、こゝちれいならさると、きゝしか、いかゝ侍るやらんと、申させ給へは

ちうしやう殿は、いさゝか、風のこゝちけにさふらひしか、ほとなくさめ侍ると、申させたまへは

母まんところ、申させ給ひけるは（18ウ）、春宮よりのおほせとて、女御より、かく、はからはせ給ふなれは、此長月には、むかへ侍るへし、そのほとに、御所をあらためさせ候はんするそやと、のたまへは

中将殿は、とかくのいらへもおはせす、なにのけうもなけにて、おはしけれは

おとゝは、御らんして、いかにや、中将は、おやのいふことを、いとおかしけにおもひなすかや、いかにと、御けしきかはりて、見えさせ給へは

いかてか、おほせをいなみたてまつるへき、ともかくも、御はからひのうへは、なに申侍るへ（19オ）きそやと、申させ給へは

政所は、きこしめして、大臣との、いらなく仰らるゝ物かな、はやくかへり給ひて、こゝちわつらはしくおはせぬやうに、いつちへも出て、うちはれ給へと、の給へは、かしこまり候とて、出たまふ（19ウ）

〔挿絵・第七図〕（20オ）

そのゝち、我御かたに、かへり給ひて、めのとをめして、あな、おもふやうにもなき、うき世のありさまかな、けふは、心にあはぬ事のみ、きゝ侍れは、あはれ、えいせんのたきあらは、みゝをあらひて、すつへき物をやと、の給へは

めのと、なに事をかきゝ給ひて、かくは、の給ふやらんと、聞えけれは

かう〳〵なん、仰さふらふほとに、心にあはぬうらめしさ、むねふたかりて、なさけなきそやと、うちなみたくみたまへは

めのと、うけ給はりて、それを、かはかり（20ウ）、むつからせ給ふは、おほけなき御こゝろかな、人人のうへに、かゝる事こそ、おほくさふらへ、よし〳〵、なけき給はすともありなん、主殿、まいりさふらはゝ、いかやうにも、はからひさふらはんそやと、いさめけれは

ちうしやう、きこしめして、たとひ、父母の、なかきふけうは、うけぬるともこの人を、見はなち侍るへきとは、おもはぬそや、けに

も、あなかちに、せいし給はゝ、ちからなく、ふかき山にもいるへしとそ、おほせける（21オ）

おちくほ　秋上（題簽）

さなきたに、秋のゆふへは物かなしく、にしふく風も身にしみて、まくらの下のきり〳〵す、こゑもやう〳〵かれ〳〵に、あはれをそふるおりなれは、なつそふ人の御ことを、よすからおほしつゝけて、ふるきまくらの下はしさ、くらふにものはなかりけり

ちうしやうも、この人に、その心さし、おいらかなれは、あさからぬ契りにて、いかてか、うちやり給ふへき、あまり、こゝちむつかしとて、さとの御所へおり給ひて、ふるき物かたりなとを、とり出させ給ひて、詩をすんし、歌（1オ）をよみ、あはれ、はかなき世の中にと、かきたる、ふるきこと葉、ひとりこちて、ひちつえつかせ給ひて、おはしけるところに

いとしのひやかに、あんないをそ、こたふる、わらは、いてゝ、たそと、いへは、此文、中将殿へまいらせ給へと、いふほとに、いつちよりそと、いへとも（1ウ）、いらへす、たゝ、参らせよと、申けるほとに、とりて、中将殿にたてまつりけれは、玉水よりの御せうそこなり（2オ）

〔挿絵・第一図〕（2ウ）

〔挿絵・第二図〕（3オ）

うちよろこひ給ひて、ひらきて、御らんすれは、秋の山より、このみをまふけさせ給ひて、めつらかに、かしつかせ給ふよしを、ことのたよりに、ほのきゝ侍ることの、うらやましさに、これにつけても、わか身は、いつの日の、いかなる時にか、むまれいてゝ、すみし宮こを、あくかれいてゝ、かかるてんとの、いふせきしつるかや、屋にて、こけの戸ほそにとちられ、ともなふ人もあらはこそ、軒にはふなるくすの葉の、うらなくものをおもふ身を、なとはかなしと、思ひ給はて（3ウ）、うちやり給ふことの、うらめしさよなと、かゝせ給ひて

かはかりに、はかなき身をは、世の中に、をきてわひしき、露ときえはや

たゝならぬうき身をなと、おほしやらぬことこそ、ほいに思ひ侍らねなと、いとねたましけに、かゝせ給ふも、あはれなり

中将は、つく〳〵御らんして、かくこそはあるへけれとおほして、中将は、この人と、心くらへをせんに、いつれか、思ひのおとり侍らむとよ、とかく、かきて、つく（4オ）すへき事にあらすとて、御つかひを、ひそやかに、おはしまのもとへ、よはせ給ひて、かへしは、わさとなきそや、ちかきほとに、しのひて、わたりなんと、よく〳〵申せとの給ひて、かへし給ふ（4ウ）

〔挿絵・第三図〕（5オ）

そのゝち、中将は、六位をめして、われ、かの玉水へ、うちこえむと、思ふなり、ちゝ大臣殿、御ようの御ことあらは、心さしありて、すみよしへまふてけるよしを、よく〳〵申せと、の給へは

六位は、うけ給はりて、ちかきほとに、御節会のおはしますに、御やくをかゝせ給ふな、いそき〳〵かへらせ給へとそ、申ける

中将は、わらは、たゝひとり、つれさせ給ひて、あさまたきに、いて給はんと、したまひけるか

おりふし、主殿のつほねは、きたりて、いかにや、このほとは、う

への御ことのみしけ（5ウ）くて、こゝろなから、まいり侍る事もさふらはす、まんところのおほせには、中将殿、なにとありけるやらん、御こゝろむつましけに、明くれみえ給ふこそ、いと心もとなけれ、いかなることをかやみぬるそや、よく〳〵たつねてこよと、の給ひしなり、けにと、おほしめしけるそや、かの君の御ことにのみ、御心うつさせ給へは、よろつにうとくこそ、おはすらめと、思ひ侍るそやと、聞えけれは

中将、聞しめして、されはこそ、今むかへる人を、心におもひそめねは、よろつにつけて、ものゝけ（6オ）ちめ、みえ侍るそや、かね〳〵、御身か、しれることく、むかへぬるとも、いかてか、ことのすなほなるへき、いみしきことは、いてこすして、おかしきことのみ、いやまさりなんと、おもひしに、たかはさるそや、たゝ、わかねかひは、日ころ、むつひし人を、むかへて、めやすく、かしつかはやとのみ、おもへは、よろつに、うとくなりて、人にも、にくさけに、おもはるゝそやと、のたまへは

とのも、うちきゝて、うへ〳〵の御はからひの、ひめきみを、いくほともあらす、みすて給ひなは、いかて、御ためよかるへき（6ウ）、こゝろなかく、ものし給ひて、よき時節をとり、いかやうにもしたまへと、申けれは（7オ）

〔挿絵・第四図〕（7ウ）

中将、きゝ給ひて、これみよ、文こしさふらふか、みるよりあはれに思ひて、こらへつへうもなけれは、けふは、しのひてこさはやと、もよほし侍るそやとて、御文とりいてゝ、とのもにみせ給へは主殿、つく〳〵とみたてまつりて、あはれにそきゝける、けにも、御ことはりにこそ、かく、おほしつゝくるもいたはしく、とかく、御身の、こゝち、むすほゝれ給ふも、御ことはりそやとて、なみたをともにそなかしにける

ちうしやう、の給ふは、かの人へ、こしたて侍るへし、やかて、かへりこんと、の給へ（8オ）、主殿も、むかへさせ給ふ

ひめ君も、何とやらん、御こゝちあしとて、丁の内にのみ、打こもりおはしまして、なかめかちにおはしけるよし、政所のおほせにてさふらふそや、とき〳〵は、おはしまして、打かたらひて、したしみ給へ、たかきもひくきも、女は、ひとつ心にて、おつとの、もたする心にて侍るそやと、うちあてゝ、聞えけるもかしこし

中将、うなつき給ひてけれは、とのもは、とくして、かへりにける（8ウ）

〔挿絵・第五図〕（9オ）

其のち、中将殿は、わらはひとり、御ともにて、しのひやかに、くたり給ひけるか、ほとなく、おはしつきて、いつちにてかあるらんと、このもかのもを尋ね給ふか、ある沢へに、あやしけなる女の、わらは二三人、草の葉をつみをりけるに、かう〳〵ある人やあるらん、をしへよと、の給ひけれは、かしこまり候とて、中将とのゝ、さきに立て、あゆみけるか、ほとなく、是に候とて、かへりぬ

中将、つく〳〵とみ給ふ、まことに、あやしきかやはらのおくに、いさゝかしつらひたるか、軒は、つたかつらの、くち（9ウ）葉なるか、はひまとはりて、いとものあはれなるに、小柴垣のあみ戸をゝしあけて、たれか有よと、申させ給へは

めのと、中将とのゝ御こゝと聞より、ついたちて、あら、めつらしの御入やとて、ひめきみそかくと、申けれは

ひめ君は、さしいて給ひて、中将とのと、み給ひしより、まつ、は

ら〳〵とそ、なかせ給ふ（10オ）

〔挿絵・第六図〕（10ウ）

〔挿絵・第七図〕（11オ）

中将も、ひめ君の御すかたを、御らんして、御泪くみ給ふ、めのとは、御手水をとりて、御あしをすまして、そのゝち、座につかせ給ひて

いかにや〳〵、御身のことのみ、かた心に思ひこちて、夢にもうつゝにも、わするゝことはなきそとよ、女御、ちゝ大臣とのゝ、御はからひにて、人をむかへて侍れとも、さらに、心もうちとけす、うちかたらふ事もなけれは、この人も、いさめるこゝちもおはせす、たた、つれ〳〵にて、心ちもにこりてみえ侍るそや、なかき夜のめさむるおり〳〵は、ありし（11ウ）むかしのむつことを、おもひいてゝ、ひとり、なみたにうちむせふありさまは、まくらよりほか、しる人もなきそやと、さめ〳〵となき給へは

ひめきみは、日ころのちきりにたかひて、おり〳〵のふみたに、給はらぬことの、うらめしさよ、あたらしき人を、うちかたらひ給へは、うつれはかはる、うき身のならひなれは、なけくへきにしもあらねとも、ひとりおはするおやを、ふりすてて、かやうに、いふせき住ゐをなせしも、たれ（12オ）ゆへそや、ひとへに、御身とちきりしゆへに、かくなり行と、おもへは、うらみは、ことさらのこるそや（12ウ）

〔挿絵・第八図〕（13オ）

たゝならぬ身にしあれは、一かたならぬおもひにて、とにもかくにも、みやこのことのみ、思ひいたさぬおりもなく、なみたのたねのみ、つくせるを、おほしやらぬもうらめしやと、かきくとき給ふも、ことはり也

さては、ちうしやうも、わか方さなにて、思ひくらせるも、いかてか、御身におとり侍らん、御こゝろやすくおもひ給へ、とく〳〵、この人をゝくりまいらせて、わか御所へむかへて、めやすくあらせたてまつるへきそや、さんは、いつなるらん、うしろめたくこそおもひ侍れと（13ウ）、のたまへは

くる月ころと、おほえ侍ると、の給へは

さもあるならは、めのとよ、はやく、わかかたへ人をこし候へと、いとわりなくそ申させ給ふ

かくて、こゝにおはして、たかひに、あたくらへまし〳〵て、山里の、いとあはれなる事からを、なかめくらし給ひけるに、しつかしわさの、あさゆふに、やすらかなる事もなく、わひしけなるふせいを、み給ふにつけても、うき世のありさま、はかなく（14オ）、あはれにそおほしける

中将とのは、月ころ、おほしめしあかぬ中なれは、一日二日と、くらし給ふか、あかすかなしくおほして（14ウ）、はなれもやらせ給はす、しはし、こゝにておはしける（15オ）

〔挿絵・第九図〕（15ウ）

〔挿絵・第十図〕（16オ）

さるほとに、みやこには、大臣の御節会おはしけるにつゐて、この中将との、内弁のやくに宣下せられけるに、おはせさりけれは

大臣との、すみよしまふてと、きゝしか、いつちへか行つらんと、六位をめして、御たつねありけれは

われらも、さやうにうけ給はり侍ると、申す

大臣殿、今宵の内弁、つとめはつれ候はゝ、宮このうちには、かな

ふましきにてあるそと、いからせ給ふ
されは、くきやう、殿上人、上達部にいたるまて、をの〳〵座へうつらせ給ふか（16ウ）、中将おはしまさねは、ちからなく、新三位の中将、このやくをそつとめ給へりける（17オ）

〔挿絵・第十一図〕（17ウ）

〔挿絵・第十二図〕（18オ）

かゝるほとに、六位は、文かきて、玉水へ、いそき〳〵わたらせ給へと、かきけれとも、とみにもいてやり給はて、明る月のくれかたに、京へおはしけるほとに
父大臣殿、大きにいからせ給ひて、のりよしの判官を御つかひにて、中将、わか猶子として、その祖をまほりて、朝につかへたてまつるへき身の、世をないかしろにおもひて、みつからか心に、よろつまかせ侍ることの、つみ、いくはくそや、君より、中納言のせんし下さるれは、いなみたてまつるに、春宮女御より（18ウ）、わか子とむまるゝによりて、ふさいをはからひ給ふに、かたしけなしとはおもひ侍らて、かたはらにうちやりて、ゆく末もしらす、こゝかしこ、さまよふ事、節会の御やくを、かねてきゝなから、いつちへ行やらん、あとけちて、つとめさる事、われ、かゝるまつりことをうけ給はる身の、かはかりにけなきものを、みやこにをきては、そのまつりこと、きよからす
君も、臣も、日ころのきりやうにちかひて、うときものとなりたるは、ひとへに、大臣かしわさなりと、申させ給ふは、ことはり（19オ）そや、さかなくも、うしろゆひをさゝるゝ事こそ、きつくわいなれ、すくに、流さいにさすへしと、いらなくおほせつけらるれはちからなく、中将殿にまいりて、このよしをくはしく聞えけれは（19ウ）

〔挿絵・第十三図〕（20オ）

中将、いさゝかもおとろき給はす、もとより、かくあるへしと、思ひまふけしみちなれは、おとろく事はなきそかし、はい所はいつちなるらんと、とはせ給へは
はりまのくに、竹の岡とかや申ところへ、うつしたてまつれとの、御さたにて侍ると、申せは
今一たひ、はゝまんところへまいりて、御目にかゝりたくおもへとも、かゝる身となれは、それもちからなしとて、一間所にいらせ給ひて、玉水の御かたへ、ふみ、こま〳〵あそはして、六位に、これをたしかにとゝ（20ウ）けよと、なみたなからにわたし給へり、御母まんところへも、いま又、かたらひたまへる、ひめきみへも、御ふみ、まいらせ給ふ
すてに、判官らは、むまにて、けいこつかまつるへしとて、もよほしけれは
中将との、六位をめして、おほせけるは、われ、かゝるなんと、なりゆく事も（21オ）、ひとへに、この女房ゆへなれは、ひたすらに、御へんをたのみ侍るそや、くる月ころには、さんをとくへし、男子ならは、なんち、心をそへて、わかかたみにおもひてそたてゝ、なき身とならは（21ウ）、法師にもなして、あととはせよ、文には、くはしくかきたるなと、こま〳〵きこえさせ給ふも、あはれなり（22オ）

〔挿絵・第十四図〕（22ウ）

〔挿絵・第十五図〕（23オ）

御母政所は、ひとへに、ゆめのこゝちし給ひて、まことに、人にす

くれて、いみしき中将とて、うらやまれしものゝ、いかなるてんまのしやうけにてや、かゝるうき身とはなり行らん、たゝひとりある中将を、かく、させんのたひにまとはして、老の身の、あとにのこりて、はかなく、ものを思はなんことの、かなしさよとて、こゑもおします、なけかせ給ふも、あはれ也

さるほとに、中将殿、けいこのふしともに、かこまれて、さすらへのたひに、おもむき給ふそ、あはれなる（23ウ）、住なれ給ひしみやこを、いて給ふとて、かくそよみ給ひける

けふまても、たひちにまとふ、われなれは、たひたつとても、おなしたひとは

かやうに、すさみ給ひ、いて給ふほとに、六位も、ひやうこのうらまて、をくりたてまつりける（24オ）

〔挿絵・第十六図〕（24ウ）

〔挿絵・第十七図〕（25オ）

それより、御舟にめされて、いそき給ふほとに、ほとなく、はりまとかやにも、つかせ給ふ、竹の岡のしゆこ人にあつけて、人〳〵は、みやこにかへりける

しゆこ人は、あたらしく家をつくりて、中将殿を入たてまつり、あさゆふにまいりて、かしつきたてまつるを、み給へは、にくさけなるおのこの、ひなひたるか、たみたるこゑにて、ものきこゆるも、あいなきやうにはあめれと、又けう有てみえわたりける、ともなひ給ふ人もあらはこそ、いつしかの御あそひには、みやこよりもたせ給ふ（25ウ）御琴をとりいてゝ、ひきならしあそひたまふに、まことに、ひなのことなれは、これをしる人もあらはこそ、たゝ、めつちかに、おもしろき事そとて、あやしのしつにいたるまて、みゝをそはたてゝそ、きゝにける

こゝに、けんみつの二ほうをしゆしける、そうのありけるか、これをきゝて、このところのしゆこ人、有治の別所といへる人と（26オ）、うちつれて、中将へまいり、さこそゆゝしき宮この、くうてん、らうかくのうちに、おはしまして、かゝる、くさふかき西海のはてに、御いりさふらひて、さこそものうくおほしめしさふらはめ、御心のうちこそ、あはれには（26ウ）思ひたてまつれとて、あさなゆふなにまいりて、御つれ〳〵をそ、なくさめたてまつりける（27オ）

〔挿絵・第十八図〕（27ウ）

〔挿絵・第十九図〕（28オ）

中将とのは、うらはまのありさまをみはやと、おほしめして、この人〳〵に申させ給へは、うけ給はりて、御ふねをしつらひて、うちのせたてまつり、あみをおろさせ、海士にかつきさせなとして、ひめもす、あかしくらさせ給ふ

ひるつかたは、かゝるあそひにて、うちまきらはし給ふか、日もくれかたよりは、みやこの御かた、こひしくおほしめし、人しれぬ御なみたのみ、なかし給へり、中にも、玉水の御方（28ウ）、いかゝし給ひつらんと、おほしめして、夢になりとも、此人に、今一たひ、あはまほしとそ、おほしける（29オ）

〔挿絵・第二十図〕（29ウ）

〔挿絵・第二十一図〕（30オ）

さるほとに、六位は、玉みつへまいりて、姫君に、御文たてまつりけれは、ひらきて、み給ふに

もとより、あふはわかれのはしめにし侍れは、なけくへきにはあら

ねとも、おもひの外なる御かんきをうけて、さいかいのはてに、流人と成行身なるそや、すてに、みやこをいてしとき、今一たひあはてと、いかはかりおもひしかとも、けいこのものゝふともに、かこまれぬれは、ちからなく、六位によく〳〵きこえけるそや、さんをとけさせ給ひて、なんしならは、わかいはんやうにし給ふへ（30ウ）し

かねて思ひつゝけしは、御身をみやこへうつして、こゝろやすくあらせはやと、おもひし事も、いたつらになりぬることの、くちおしさよ、かゝるうき身となりぬる事も、よく〳〵おもへは、御身をふかくおもひしゆへに、よろつかきくれて、こゝちまとひ、世のわさもつとめ侍らて、かくうきなをなかし侍るそや、御身も、わかうへ、わすれ給はすは、しゝたりときゝ給ひなは、のちの世をたのみ侍るそやなと、かゝせ給ひて、おくに

玉のをの、たえすもあらは（31オ）、うき世にて、今ひとたひを、ちきることの葉

と、あるをみたまひて、御かほにをしあてゝ、引かつきふし給ふ（31ウ）

〔挿絵・第二十二図〕（32オ）

六位は、めのとにきこゆるやうは、御身も、たゝならすわたらせ給へは、いたくなけかせ給ひては、さはりともなり給ふへし、これは、ひとへに、中将との、あまりにひめきみをおほしけるにより て、御心をすくよかになをし給はんとての、御いましめと、きこえさふらへは、ほとなく、かへり給ふへし、そのおりふしに、わか君、おとなしやかに、よういくおはして、みせさせ給はゝ、うきを引かへて、ことたつことのあるへきそや、よく〳〵、ひめきみをかしつき給へと、申けれは

めのと、申けるは（32ウ）、今は、ほとはるかにおはしませは、いかにおほしめすとも、中将とのゝ御たよりは、かたかるへし、けふよりは、御身を、中将とのとたのみ給はては、いかてかことのよすかあらんと、いとあはれにきこえけれは

六位は、これをきゝて、いまめかしきことをきくものかな、なにはにつけて、それかし、あるうへは、心やすく思ひ給へ、中将とのにつかうるも、ひめきみにつかふまつるも、おなしみちにて侍るそや、中将、かやうに成給ふことのかなしさは、ひめ君よりも、まさりて、心かなしく（33オ）侍れとも、いまさらせんかたなきそかし、あはれ、わかおもひには、中将とのと御ともして、いつしか、つかへ侍りなは、かはかり、ものはおもふましと、これのみ、あさゆふ思ふそやと、袖をかほにをしあてゝ、さめ〳〵とそなきにける（33ウ）